



# プライマリ・ケアにおける65歳以上の受診患者のインフルエンザワクチン接種要因の探索

著者	梶川 奈月
発行年	2020
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2019
報告番号	12102甲第9557号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00160992">http://hdl.handle.net/2241/00160992</a>

氏 名	梶川 奈月
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	博甲第 9557 号
学位授与年月	令和 2 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学位論文題目	プライマリ・ケアにおける 65 歳以上の受診患者の インフルエンザワクチン接種要因の探索
主 査	筑波大学教授 博士（医学） 人見重美
副 査	筑波大学教授 保健学博士 安梅勅江
副 査	筑波大学講師 博士（医学） 増子裕典
副 査	筑波大学助教 博士（医学） 堀 愛

## 論文の内容の要旨

梶川奈月氏の博士学位論文は、プライマリ・ケアを受診する 65 歳以上の患者を対象に、患者がインフルエンザワクチンを接種するかどうかを決める要因について調査したものである。その要旨は、以下の通りである。

### 目的

インフルエンザは、毎年世界的に流行する疾患で、特に高齢者では入院や死亡のリスクが高い疾患である。インフルエンザワクチンは、インフルエンザによる入院・死亡の減少に有効であることがわかっており、高齢者は毎年接種することが推奨されている。しかし、65 歳以上の日本人では、接種率が 50%程度にとどまっており、接種率を向上させることが、わが国の公衆衛生上重要な問題である。これまでわが国では、インフルエンザおよびワクチンに対する患者の考え、あるいは医師からの勧めなどが、インフルエンザワクチンを接種するかどうかを決める要因として報告されている。しかしこれらの先行研究では、高齢者が接種するかどうかを決める要因については、十分調査できていない。

このため、著者は、日本でのインフルエンザワクチンは医療機関での接種が原則であるため、プライマリ・ケア医が高齢者のワクチン接種率の向上に重要な役割を果たすだろうとの仮説に基づき、65 歳以上のプライマリ・ケア医外来を受診した患者を対象に、インフルエンザワクチン接種に関連する要因、および接種・未接種の理由を調査した。

### 対象と方法

北茨城市民病院（病床数 183 床）の一般内科外来および附属家庭医療センター（無床）を受診した 65 歳以上の患者を対象に、無記名自記式調査票による横断研究を、インフルエンザワクチン接種が終了した時期に 2 回（2017/18 年シーズンおよび 2018/19 年シーズンの 1～2 月の 2 週間）行った。

2017/18 年シーズンの調査のために作成した質問票は、対象者の属性、医師への信頼度、インフルエンザやワクチンに関する経験や考え、ワクチン接種・未接種の理由、から構成されている。また、2018/19

年シーズンの質問票は、質問の内容を変更し、属性、インフルエンザやワクチンに関する経験や考え、ワクチン接種・未接種の理由から構成している。これらの質問票への回答から、ワクチン接種の有無を目的変数、その他の回答を説明変数とし、各説明変数について単変量解析を行い、有意な関連があった変数についてロジスティック回帰分析を行って、ワクチン接種に関連する要因を探索的に分析している。加えて、接種・未接種の理由、2 シーズン継続して接種したかどうかについても分析している。

## 結果

2017/18 年シーズンの調査において、著者は、377 人に調査票を配布し、316 人から回答を得ている。回答者の属性は、年齢の中央値が 74 歳(四分位範囲 69-81 歳)で、男性が 163 人(51.6%)だった。2018/19 年の調査では、443 人に調査票を配布し、328 人から回答を得ている。回答者の属性は、年齢の中央値が 75 歳(69-80 歳)、男性が 137 人(41.8%)だった。ワクチン接種率は 64.0%で、全体の 32.4%がかかりつけ医から接種を勧められていた。

2017/18 年シーズンにインフルエンザワクチンを接種したことと関連があったのは、「ワクチンは有効であると思う (オッズ比 [OR] =4.73, 95%信頼区間 [95%CI] =2.08-10.8)」、「副反応が出る可能性は高いと思う (OR= 0.33, 95%CI=0.15-0.74)」、「医師から勧められた (OR=2.49, 95%CI=1.18-5.25)」、年齢が高い (OR=1.09, 95%CI=1.03-1.14)だった。また、2018/19 年シーズンにインフルエンザワクチンを接種したことと関連があったのは、「ワクチンは有効であると思う (OR=5.88, 95%CI=2.20-15.7)」、「副反応が出る可能性は高いと思う (OR=0.17, 95%CI=0.071-0.41)」、「かかりつけ医から勧められた (OR=4.50, CI=1.94-10.5)」、「家族・友人から勧められた (OR=2.84, 95%CI=1.25-6.45)」、「罹患する可能性が高いと思う (OR=3.54, 95%CI=1.54-8.14)」、「前年に新しく診断された疾患がない (OR=0.28, 95%CI=0.11-0.72)」、女性 (OR=0.45, 95%CI=0.22-0.93)だった。未接種者の約半数が、「受けようと思っていたが結局受けなかった」「考えたこともなかった」と回答していた。また、2017/18 年シーズンのワクチン接種者のうち 90.5%が、2018/19 年シーズンにもワクチンを接種していた。接種者のうちワクチン接種期間中に受診したと回答した人は 95.2%、次年度に接種しようと思うと回答した人は 98.0%だった。

## 考察

本研究では、65 歳以上の患者に対するインフルエンザワクチンの接種には、ワクチンが有効だと考えていること、副反応が出る可能性が低いと考えていること、かかりつけ医や家族・友人から勧められたこと、が関連していることを明らかにした。この結果を踏まえ、著者は、医師からの勧めを増やし有効性や副反応についての正しい情報を伝えること、患者の家族・友人に対しても高齢者にワクチン接種を受けるよう勧めること、がワクチン接種率の向上に有用なのではと考察している。また、一度ワクチンを接種すると次のシーズンも継続しやすいことから、初めての接種を促すことが特に必要である、とも考察している。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本研究から著者は、プライマリ・ケア医が、高齢者やその家族に対しワクチン接種を勧めること、有効性や副反応についての情報を提供し認識を変えさせることにより、インフルエンザワクチンの接種率を向上させようことを明らかにした。このことは、高齢者のインフルエンザワクチン接種率の低いわが国において、今後とるべき対策の方向性を示す重要な知見と考える。

令和元年 12 月 23 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(医学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。